様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３３３０３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１５８４０

研究課題名（和文）外来化学療法を受けるがん患者の治療と就労の両立支援モデルの開発

研究課題名（英文）Approaches to balancing Chemotherapy and Work among Japanese Cancer Patients

研究代表者
北村　佳子（KITAMURA, Yoshiko）

金沢医科大学・看護学部・講師

研究者番号：２０４５４２３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究結果として、「身体症状のひどさ」、「症状緩和のため頓服薬を服用」、「身体によい食事」、「平静を保持」、「上司や同僚への気兼ね」、「仕事の意味を再考」、「身体症状の改善」、「状況変化のなさ」があった。
本研究結果から医療者が行うケアで最も重要なことは、まずは身体症状を速やかに改善するための支援であるといえた。次に大切な事は、身体症状のつらい中で、「平静を保持する」など精神的苦痛も経験していることを十分考慮した関わりが必要であると示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
働く世代へのがん対策の充実が国の重点的課題としている。また、働く患者が直面する課題と影響要因には、経済的な問題だけでなく職場関係者や医療者とのコミュニケーションや心身の不調などが指摘されている。そこで、医療者が支援すべき具体的な支援のあり方を見出すため調査を行った。最も重要なことは、まずは身体症状を速やかに改善するための支援であるといえた。そして、外来身体症状のつらい中で、職場関係者に「平静を保持する」など精神的苦痛も経験していることを十分考慮した関わりが必要であると示唆された。

研究成果の概要（英文）：Issues that respondents often mentioned as part of balancing work with the burdens of cancer were categorized as follows: “Severe physical symptoms,” “Taking medicine to alleviate symptoms,” “Foods that are good for the body,” “Remaining calm,” “Feeling constrained by bosses and colleagues,” “Rethinking the meaning of work,” “Ameliorating physical symptoms,” and “Absence of change in condition.”
The results of this study suggest that the most important service that healthcare personnel should provide is helping middle-aged male cancer patients ameliorate their current physical symptoms. The second most important consideration would be having a deep understanding of their ongoing mental distress, such as how to help the patients “Remain calm” in the face of severe physical symptoms.

研究分野：がん看護

キーワード：がん看護　外来がん化学療法　就労　両立支援

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)背景

日本のがん対策として、第 2 期がん対策推進基本計画では働く世代へのがん対策の充実が重点的に取り組むべき課題として新たに盛り込まれた（厚生労働省，2012）。働く患者が直面する問題と影響要因には経済的な問題だけでなく、職場関係者や医療者とのコミュニケーションの不備、さらに就労に関連した心身の不調などの悩みがあり、患者本人のセルフケア能力を高める必要性が指摘されている（高橋，2013）。

2002 年の診療報酬改定以降、各施設の外来化学療法室が充実化し、外来化学療法を受けるがん患者は増加しているため、医療者のいない在宅においてセルフケアができることが浸透してきている（吉田他，2012）。そこで、がん患者には症状に対するアセスメント力や対処行動、さらにはその行動を評価する力が必要となる。これらの能力は、日常生活と深く関与するためマネジメント力が必要とされ、これをがん患者が習得できるよう看護師には患者教育することが求められている（内布他，2008）。しかし、セルフマネジメント力に着眼した研究では、疾患や治療特有の症状に対するマネジメント力に関するもののみであり、患者の日常生活を含めた研究はなされていない。

研究代表者は、外来化学療法を受ける消化器（胃もしくは大腸）がん患者 62 名を対象に症状体験の実態と自己効力感、セルフマネジメント力、QOL の関連についての調査を行った（北村，2015）。調査の結果、対象者の 7 割以上の人に疾患や治療による症状体験があった。症状体験の実態は、「便の性状や回数が変わった（36.1%）」、「食事の摂り方が変わった（41.0%）」が多く、これは消化器がん術後の生体機能の変化や化学療法使用薬剤による影響であると考えられた。また、心理社会的変化では「症状を軽減するために費やすエネルギーが大きい」認知している対象者は無症状を示す Performance Status 0 と判定された患者の 40.0%に、さらに心理社会的変化「自分の生活が症状に脅かされている」では 33.3%に認めた。つまり、身体的評価だけでは必ずしも患者の症状体験を反映しきれず、特に心理社会的変化に示された生活への脅かしの体験に対し、医療者は十分に対応しきれていないことが推測された。さらに、自己効力感、セルフマネジメント力、QOL の関連では、症状体験がある患者におけるセルフマネジメント力と自己効力感、自己効力感と QOL との得点間に有意な正の相関も認められた。つまり、QOL 向上につながるためにセルフマネジメント力を高める重要性が示された。本研究は、症状マネジメントをふまえ、より高次のニーズである就労に焦点をおき、治療と就労の両立の構造を測定するための質問紙を作成することによって、外来化学療法を受けるがん患者の特徴に応じた治療と就労の両立支援として新たな介入の示唆を得ることができる。

外国では、慢性疾患患者の自己管理支援プログラムが開発されており、患者が適切な療養行動がとれる介入方法が報告されている（Anne kennedy，2007）。しかし、日本の外来化学療法を受けるがん患者が治療と就労を両立していく上でどのような体験をしているのか、その現状は十分に明らかになっておらず、具体的な支援のあり方は検討されていない。

そこで、外来化学療法を受けるがん患者が治療と就労を両立していけるように、その支援モデルを開発する必要がある。

(2)本研究における用語の定義

「化学療法と就労との両立」とは、がん患者が暮らしを立てる手立てとしての仕事に従事しながら、医師に必要な治療と説明を受け、自身も納得してがん化学療法受けていくこととする。

２．研究の目的

本研究の目的は、外来化学療法を受けるがん患者の治療と就労の両立支援モデルを開発し、その有効性を検証することである。

本研究では、目標を症状コントロールすることに留まらず、治療と就労の両立にまで発展させたものである。まずは、外来化学療法を受けるがん患者の治療と就労に関する体験の現状を質的研究手法により明らかにする。その結果、治療と就労の両立の構造の違いが明らかとなる。

次に、構造の違いに応じた支援モデルを開発する。これにより、外来化学療法を受けるがん患者のニーズにあった治療と就労の両立支援のあり方が見出せると考えた。

具体的プロセスとして次の段階をふむ。

第 1 段階「治療と就労の両立の構造」質問紙の試案作成：質的研究手法により外来化学療法を受けるがん患者の治療と就労の両立の構造を明らかにし、構成因子と特性から質問項目を抽出する。

第 2 段階 質問紙の信頼性及び妥当性の検討: 横断的調査により信頼性及び妥当性を検討し、質問紙を完成させる。

第 3 段階 外来化学療法を受けるがん患者の治療と就労の両立支援モデルの開発:因子各項目の因子得点を基に被験者を分類し、治療と就労の両立支援モデルを開発する。

第 4 段階 介入し事前事後テストで検証:開発した治療と就労の両立支援モデルの有効性を検証する。

３．研究の方法

具体的プロセスとして次の段階をふむ。

第１段階「治療と就労の両立の構造」試案作成：質的研究手法により外来化学療法を受けるがん患者の治療と就労の両立の構造を明らかにし、構成因子と特性から質問項目を抽出する。

第 2 段階 質問紙の信頼性及び妥当性の検討: 横断的調査研究により信頼性及び妥当性を検討し、質問紙を完成させる。

第 3 段階 外来化学療法を受けるがん患者の治療と就労の両立支援モデルの開発:因子各項目の因子得点を基に被験者を分類し、治療と就労の両立支援モデルを開発する。

第 4 段階 介入し、事前事後テストで検証：開発した治療と就労の両立支援モデルの有効性を検証する。

４．研究成果

(1)研究結果

①がん患者の治療と就労の両立の構造を構成する概念

がん患者の化学療法と就労の両立の構造には、【身体症状のひどさ】、【上司や同僚への気兼ね】、【平静を保持】、【状況の受け入れ】、症状を軽減するために薬を飲む】、【体によい食事をとる】、【身体症状の改善】、【状態変化のなさ】、【仕事の意味の再考】の 9 つの概念があった。

【身体症状のひどさ】に関わるサブ概念には、4 つあった。それは、＜作業効率への影響＞、＜術後の体力回復の程度＞、＜業務遂行度＞、＜集中力の変化＞であった。

【上司や同僚への気兼ね】に関わるサブ概念には、6 つあった。それは、＜抗がん剤投与への緊張度＞、＜抗がん剤投与日の尊重度＞、＜手術後早期退院の希望の表出＞、＜上司と同僚への感謝＞、＜自分に向けられる監視＞、＜上司や同僚からの反応＞であった。

【平静を保持】に関わるサブ概念には、4 つあった。それは、＜治療当日の中止についての考え＞、＜治療中止を回避するための努力＞、＜取り組みの自己評価＞、＜人間関係の友好度＞であった。

【状況の受け入れ】に関わるサブ概念には、4 つあった。＜当日の治療中止の考え＞、＜治療中止を回避するための努力＞、＜取り組みの自己評価＞、＜周囲との関係性＞であった。

【症状を軽減するために薬を飲む】に関わるサブ概念には、6 つあった。それは、＜排便の調整＞、＜痛み調整＞、＜皮膚障害調整＞、＜吐き気の調整＞、＜止血＞、＜血糖コントロール＞であった。

【体によい食事をとる】に関わるサブ概念には、3 つあった。＜食事内容の心がけ＞、＜食事時間への心がけ＞、＜食べ方への心がけ＞であった。

【身体症状の改善】に関わるサブ概念には、2 つあった。それは、＜症状変化の改善度＞、＜体重の戻り＞であった。

【状況変化のなさ】に関わるサブ概念には、6 つあった。それは、＜入退院の繰り返し＞、＜集中力の低下＞、＜療養と就労の両立の困難感＞、＜努力の限界＞、＜転移・再発の可能性＞、＜医療費の負担感＞があった。

【仕事の意味の再考】に関わるサブ概念には、3 つあった。＜否定的な捉え方＞、＜やりがい＞、＜社会とのつながり＞であった。

②がん患者の治療と就労の両立の構造

がん患者の化学療法と就労の両立の構造には、【身体症状のひどさ】が中心概念であった。【身体症状のひどさ】には、化学療法による副作用だけでなく、手術後の体重減少や体力低下も含む ＜作業効率への影響＞、＜術後の体力回復の程度＞、＜業務遂行度＞、＜集中力の変化＞があった。【身体症状のひどさ】の度合いによって、患者は仕事への急な休暇や業務内容への考慮を申し出なければならなかった。そのため、常に職場では【上司や同僚への気兼ね】があった。

患者は、療養の必要性は十分理解していた。しかし、仕事を継続するためには治療日のみを休暇にするなど願いなど【上司や同僚への気兼ね】には、＜抗がん剤投与への緊張度＞、＜抗がん剤投与日の尊重度＞、＜手術後早期退院の希望の表出＞、＜上司と同僚への感謝＞、＜自分に向けられる監視＞、＜上司や同僚からの反応＞によって異なる様相を呈していた。

患者は、【上司や同僚への気兼ね】を抱きながら、外見上は努めて【平静を保持】していた。これは、がんやその治療に伴う【身体症状のひどさ】を周囲に察知されないためにも慎重に心がけていることであった。中には、自分ががん患者であることや療養中であることを同僚に表明していない者もいた。【平静を保持】には、＜治療当日の中止についての考え＞、＜治療中止を回避するための努力＞、＜取り組みの自己評価＞、＜人間関係の友好度＞によって構成されこれらによって様相が変化していた。

【状況の受け入れ】は、【平静を保持】するために実施する患者の試みであった。＜当日の治療中止の考え＞、＜治療中止を回避するための努力＞、＜取り組みの自己評

価＞、＜周囲との関係性＞によって様相は異なった。そして、患者が自身の【状況の受け入れ】を行うために、2 つの行為をとっていた。それは、【症状を軽減するために薬を飲む】と【体によい食事をとる】であった。これらの行為は患者が積極的に取り組むというよりは、期待する効果が得られるかどうか疑いながらの取り組みであった。期待する身体症状の改善は得られない時は、患者の【状況の受け入れ】を困難にし、職場での【平静を保持】にも影響していた。

【症状を軽減するために薬を飲む】には、＜排便の調整＞、＜痛み調整＞、＜皮膚障害の調整＞、＜吐き気の調整＞、＜止血＞、＜血糖コントロール＞によって構成され、これらの程度によって様相が異なった。一方、【体によい食事をとる】には、＜食事内容の心がけ＞、＜食事時間への心がけ＞、＜食べ方への心がけ＞があった。【体によい食事をとる】は、自分の健康に対する努力であり、嗜好や楽しむためではなかった。患者は、このような努力に重ねて、さらに【状況の受け入れ】にも努めていた。

【身体症状の改善】には、＜症状変化の改善度＞、＜体重の戻り＞によって様相は異なった。また、【身体症状のひどさ】へと接続していった。また、【状況変化のなさ】には、＜入退院の繰り返し＞、＜集中力の低下＞、＜療養と就労の両立の困難感＞、＜努力の限界＞、＜転移・再発の可能性＞、＜医療費の負担感＞によって異なる様相を呈していた。そして、【仕事の意味の再考】には、＜否定的な捉え方＞、＜やりがい＞、＜社会とのつながり＞によって異なる様相を表わしていた。

患者は、【症状を軽減するために薬を飲む】や【体によい食事をとる】の努力や、【状況の受け入れ】の努力が、【身体症状の改善】に接続できれば、就労を継続していける可能性があった。しかし、【状態変化のなさ】が認められた場合には、患者は【仕事の意味の再考】をし始め、就労の意味が見出すことができなければ、療養との両立が困難となり、退職という意思決定することが伺えた。たとえ、就労継続を意思決定しても、患者は、療養と就労との両立のバランスを意識しつつ、バランスが保てない場合、【仕事の意味の再考】し、退職する可能性があった。

(2)治療と就労の両立支援のあり方

働く世代ががんに罹患した時､療養と就労との両立をどのように行っているかを調査し、医療者として必要な具体的な支援のあり方の示唆を得た。

最も重要なことは、まずは身体症状を速やかに改善するための支援であるといえた。そして、外来身体症状のつらい中で、職場関係者に「平静を保持する」など精神的苦痛も経験していることを十分考慮した関わりが必要であることがわかった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 2 件）

①「Approaches to Balancing Chemotherapy and Work among Japanese Middle-Aged Male Cancer Patients」
2019 年 1 月　2019　22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS)
The results of this study suggest that the most important service that healthcare personnel should provide is helping middle-aged male cancer patients ameliorate their current physical symptoms.
Yoshiko Kitamura

②「乳がん患者の化学療法と就労との両立のプロセス」
2017 年 2 月　第 31 回日本がん看護学会学術集会　口演
乳がん患者の化学療法と就労との両立のプロセスを記述した。概念化し支援の方略の示唆につなげる。
北村佳子、村角直子、松田琴美、浜江紀美代、久野真知子

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者

(2)研究協力者
研究協力者氏名：村角　直子
ローマ字氏名： MURAKADO,naoko

研究協力者氏名：松田　琴美

ローマ字氏名：MATSUDA,kotomi

研究協力者氏名：浜江　紀美代
ローマ字氏名： HAMAE,kimiyo

研究協力者氏名：久野　真知子
ローマ字氏名：HISANO, machiko

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。